

求塚

古名

処女塚

世阿弥作

観阿弥作とも

前

ワキ

西国の僧

シテ

里女

ツレ（二人）

同

後

ワキ

前に同じ

シテ

菟名日処女

季は地は正月 摂津

「鄙の長路の旅衣。／＼。都にいざや急がん。

詞 「是は西国方より出でたる僧にて候。我未だ都を見

ず候ふ程に。只今都に上り候。

道行 「旅衣。八重の汐路の浦づたひ。／＼。船にても行

く旅の道。海山かけて遙々と。明かし暮らして行く程に。名にのみ聞きし津の国。生田の里に着きにけり。／＼。

「若菜摘む。生田の小野の朝風に。猶さえかへる袂

かな。

ツレ 「木の芽も春の淡雪に。

三人 「森の下草なほ寒し。

「深山には松の雪だに消えなくに。

三人 「都は野辺の若菜摘む。頃にも今は為りぬらん。思ひやるこそゆかしけれ。

「こゝは又もとより所も天ざかる。

三人 「鄙人なればおのづから。憂きも命の生田の海の。

身の限りにて憂き業の。春としもなき小野に出でゝ。

下歌「若菜摘むいく里人の跡ならん。雪間あまたに野はなりぬ。

上歌「道なしとても踏み分けて。く。野沢の若菜今日

摘まん。雪間を待つならば。若菜も若しや老い

もせん。嵐吹く森の木陰。小野の雪も猶さえて。

春としも七草の。生田の若菜摘まうよ。く。

ワキ詞
「如何に是なる人に尋ね申すべき事の候。生田とは此あたりを申し候ふか。

ツレ「生田と知し召したる上は。御尋ねまでも候ふまじ。

シテ「所々の有様にも。などかは御覽じ知らざらん。

詞「先は生田の名にし負ふ。是に数ある林をば。生田の森とは知し召さずや。

ツレ「又今渡り給へるは。名に流れたる生田川。

シテ詞

「水の緑も春浅き。雪間の若菜摘む野辺に。

ツレ「少なき草の原ならば。小野とはなどや知し召されぬぞ。

三人「三吉野志賀の山桜。立田初瀬の紅葉をば。歌人の家には知るなれば。所に住める者なればとて。生田の森とも林とも。知らぬ事をな宣ひそよ。

ワキ「実に目前の所々。森を始めて海川の。霞み渡れる小野の景色。

詞
「実にも生田の名にし負へる。さて求塚とは何くぞや。

シテ詞

「求塚とは名には聞けども。誠は何くの程やらん。わらはも更に知らぬなり。

ツレ「なふく旅人。よしなき事をな宣ひそ。わらはも若菜を摘む暇。

シテ

「御身も急ぎの旅なるに。何しに休らひ給ふらん。

三人「されば古き歌にも。

下歌地

「旅人の。道妨げに摘む物は。生田の小野の若菜なり。よしなや何を問ひ給ふ。

上歌

「春日野の。飛火の野守出で、見よ。／＼。若菜摘

まんも程あらじ。其如く旅人も。急がせ給ふ都を。

今幾日有りて御覧ぜん。君がため。春の野に出で、

若菜摘む。衣手寒し消え残る。雪ながら摘まうよ。

淡雪ながら摘まうよ。沢辺なる。氷凝は薄く残
れども。水の深芹かき分けて。青緑。色ながら

いざや摘まうよ。／＼。

ロンギ地

「まだ初春の若菜には。さのみに種は如何ならん。

シテ

「春立ちて。朝の原の雪見れば。まだ旧年の心地し

て。今年生は少なし。古葉の若菜摘まうよ。

地
「古葉なれどもさすがまた。年若草の種なれや。心
せよ春の野辺。

シテ

「春の野に。／＼。董摘みにと來し人の。若紫の菜
や摘みし。

「實にやゆかりの名をとめて。妹背の橋も中絶えし。

シテ 「佐野の莖たち若だちて。

地 「緑の色も名にぞ染む。

シテ 「長安の齊。

地 「唐齊。しろみ草も有明の。雪にまぎれて。摘みか
ぬるまで春さむき。小野の朝風また。森のしづえ
松垂れて。いづれを春とは白波の。河風までもさ
えかへり。吹かるゝ袂も猶寒し。摘み残して帰ら

ん。若菜摘み残し帰らん。

ワキ詞 「如何に申すべき事の候。若菜摘む女性は皆々帰り
給ふに。何とて御身一人残り給ふぞ。

シテ 「先に御尋ね候ふ求塚を教へ申し候はん。

ワキ 「それこそ望みにて候ふ御教へ候へ。

シテ 「此方へ御入り候へ。是こそ求塚にて候へ。

ワキ 「さて求塚とは。何と申したる謂にて候ふぞ。委し
く御物語り候へ。

「さらば語つて聞かせ申し候ふべし。昔此所に菟名日処女の有りしに。又其頃小竹田男。血沼の大丈夫と申しゝ者。彼うなひに心を懸け。同じ日の同じ時に。わりなき思ひの玉章を贈る。彼女思ふやう。一人に靡かば一人の恨み深かるべしと。左右なう靡く事もなかりしが。あの生田川の水鳥をさへ。二人の矢先諸共に。一つの翅に中りしかば。其時わらは思ふやう。無慚やなさしも契りは深みどり。

水鳥までも我故に。さこそ命は鴛鴦の。番去りにしあはれさよ。住みわびつ我身捨てゝん津の国。の。生田の川は名のみなりけりと。

「是を最期の言葉にて。く。此川波に沈みしを。取り上げて此塚の。土中に籠めをさめしに。二人の男は此塚に。求め来りつゝ。何時まで生田川。流るゝ水に夕汐の。刺しちがへて空しくなれば。それさへ我科に。なる身を助け給へとて。塚の内

に入りにけり。塚の内にぞ入りにける。（中入）

「一夜臥す。牡鹿の角の塚の草。／＼。陰より見え
し亡魂を。弔ふ法の声立てゝ。南無幽靈成等正覺。
出離生死頓証菩提。

後ジテ
「あう曠野人稀なり。我古墳ならで又何者ぞ。骸
を争ふ猛獸は去つて又残る。塚を守る悲魄は松風
に飛び。電光朝露猶以て眼にあり。古墳多くは少
年の人。生田の名にも似ぬ命。

地 「去つて久しき古郷の人の。

シテ
「御法の声は有難や。

地 「あら闇浮恋しや。

地 「されば人。一日一夜を経るにだに。／＼。八億四千
の思ひあり。況んや我等は。去りにし跡も久堅の。
天の帝の御代より。今は後の堀川の。御宇にあはゞ
我も。再び世にも帰れかし。いつまで草の陰。苔
の下には埋もれん。さらば埋れも果てずして。苦

しみは身を焼く。火宅のすみか御覽ぜよ。く。

ワキ「あら痛はしの御有様やな。一念ひるがへせば。無

量の罪をも遁るべし。種々諸悪趣地獄鬼畜生。生

老病死苦以漸悉令滅。はやく浮び給へ。

シテ「有難や此苦しみの隙なきに。御法の声の耳に触れて。大焦熱の煙の内に。晴間の少し見ゆるぞや。有難や。

詞「恐ろしやお事は誰そ。何小竹田男の亡心とや。又

此方なるは血沼の大丈夫。左右の手を取つて。来れ来れと責むれども。三界火宅の住家をば。何と力に出づべきぞ。又恐ろしや悲魄飛び去り目の前に。来るを見れば鴛鴦の。鉄鳥となつて黒金のみをば。何とか助け給ふべき。

ワキ「実に苦しみの時來ると。いひもあへねば塚の上に。

シテ 火焰一群飛び覆ひて。

シテ 「光りは悲魄の鬼となつて。

ワキ 「標を振り上げ追つ立つれば。

シテ 「行かんとすれば前は海。

ワキ 「後は火焰。

シテ 「左も。

ワキ 「右も。

シテ 「水火の責めに詰められて。

ワキ 「せんかたなくて。
シテ 「火宅の柱に。

地 「すがりつき取り付けば。柱はすなはち火焰となつて。火の柱を抱くぞとよ。あら熱や堪へがたや。

五体は熾火の。黒煙となりたるぞや。

シテ 「而して起き上れば。

地 「而して起き上れば。獄卒は標をあてゝ。追つ立つればたゞよひ出でゝ。八大地獄の数々。苦しみを

尽し御前にて。懺悔の有様見せ申さん。まづ等
活黒縄衆合。叫喚大叫喚。炎熱極熱無間の底に。
足上頭下と落つる間は。三年三月の苦しみ果て、
少し苦患の隙かと思へば。鬼も去り火炎も消えて。
暗闇となりぬれば。今は火宅に帰らんと。有りつ
る住家は何くぞと。闇さは闇しあなたを尋ね。こ
なたを求塚。何くやらんと。求めくたどり行け
ば。求めえたりや求塚の。草の陰野の露消えて。
草の陰野の露消えくと。亡者の形は失せにけり。
亡者の影は失せにけり。